
石の花

林さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

石の花

【Nコード】

N2039B

【作者名】

林さん

【あらすじ】

革命以前のロシアのどこかのお話。腕の良い石切細工の職人ユーリは貧困と過酷な制度の中で生きていた。ある日は彼は鉱山の監督に幽閉される。岩屋から逃げ出したユーリは鉱山の主である山の精「姉様」に出会う。ユーリは姉様の力を借りて監督から人々を救おうとする。四百字詰め原稿用紙で約九十枚程度。

(前書き)

これはロシアの作家、バジョーフの作品の、二次創作です。

ずいぶん昔の、古い話だ。ユーリは石の花を作った。ユーリがだれだか知らないのなら、あの、スレドニクの教会へいってみるといい。象牙細工の台座の上に、ちゃんと今でも飾られている。人は死んでも仕事は残った。そういう、職人のひとりだ、ユーリは。

ユーリは石切細工の職人だった。石切細工というのはな、緑の孔雀石の大きな塊を切り出し、そこに現れた模様を、職人の腕でみごとに加工するのさ。ユーリは数ある石切細工の中でも、ことに優れたものを作り出した。山の精霊に好かれていたのさ、坑道の奥深く、原石と水の満ちた鉱山の精霊にな。ユーリはいつでも上手に石切細工を作り出した。どんなものを作ったかって？ それぐらい腕のある職人なら、とてもいい材料を使っていたにちがいないとな？

いや、ユーリはひどく貧乏だった上に、どうにも世渡りが下手な男でな、まるで冴えない材料ばかりあてがわれていたよ。それでも不思議に、見るものをうならせる細工を、どうやってか、苦労しながら作り出したのさ。

あるとき、ユーリは、ふつつなら捨てちまうような、さえないク

ルミ大の孔雀石の石っころを、石切の工場で拾った。ユーリは二、三日そいつをひねくっていたんだが、ある日、それを器用に切り割って、くず石と呼んでだれもかえりみないような小さな宝石のかけらを、寄木細工のようにはめこみはじめた。そうして、丁寧に金を溶かし込んで、一つ一つ合わせていったのさ。

何日もかけて、彼はこつこつとそれを作った。仲間がユーリがまた変なものを作っていると笑ったもんだったが、彼はそんなことはまるで気にしなかった。何か作っているときだけ、彼はほんとうに幸せだったから、他のことはどうでもよかったのさ。とうとうそれができあがったとき、ユーリの仲間の職人たちは息を飲んだ。

それは熟れて割れたざくろのように、光を受けて輝いた。冴えない色のくすんだ孔雀石はその色がまるで寂びた果実そっくりだった。ユーリは見過ごされていた形をうまく見抜き、元々石が持っていた、天恵のような素材のながれる紋様を、果物の皮に仕立て上げていた。そして果実は、太陽の光を一たび受けたなら、レハリンの光石よりも、もっと明るく虹色に輝いた。一粒一粒が光を内に宿しきらめいていた。紅いルビーは燃えるように炎を宿し、青水晶は氷海の冷たさを手のひらまで染透らせるように光をこぼした。合わさった宝石の輝きはそれぞれの質を混じり合わせて美しさを失わず、徹すように強くなった。誰もが手のひらに乗せたとき、見とれて動けなくなつた。

ユーリは石を知り尽くしていたから、一見、なんでもないように小さな宝石をはめ込んだように見えるそれは、弱い日の光ならば一つ一つの石が個々にそれぞれの輝きを出すようにし、強い光を入れなければ、光同士が石の中で強め合って、色と強さを増し、虹色に輝くように置かれていたのだった。

どうやってそんなことができたのかって？ 何か特別なことを知っていたのだろうって？ いや、ユーリはまるでそんなことは知っちゃいなかった。日曜学校さえ満足に出ていなかったからな。ユーリはものもろくに読めない石切細工の職人だったから、人に何か特

別なわざを知っているのかとたずねられても、照れながら、「石が教えてくれる。じつとみていけば、石が納まるところを自分で見つける」と、どもりどもり言うだけだった。

それでは彼のその曖昧であやふやな感じ方のほかには、何の特別などころもなく、他の職人とさして変わらんとかな？ そうだな。しかし美しいものを作り出すにはなにか、こう、修練と、生まれ出たときからの生き方を賭けて叩き込むような何物かがあるように思う。わしが言うのは、本当に美しいものの場合だよ。一度二度見て、それで飽きられてぽいとほうられたり売られたりするような細工なら、並みの職人なら一日で両手に大盛り作り出すさ。幾度でも幾度でも人を惹きつけ、人の生き方にまでしみとおり強固な支えになる作品には、やはりそれだけの人生がいるのさ。人生なんて大げさなものか、それでも少なすぎるものかは知らないがね。

ユーリにはそれがあつた。それが何かだつて？ ううむ、わしにやわからんな。ただユーリは、根っから石が好きだった。物心ついたときには、日がな一日、石を見つめて過ごしていた。何にせよ好きでなければ、魂の一部を宿すあの輝きを、作品に封じることなどではせんさ。心の底から作り出すとき、それはもう既に本物だ。そういつたものは別に学のある人でなくたって見ればわかる。学なんぞいらん。つたわるからだ。

だからユーリはうとまれた。ひがみの強い職人はみなユーリを嫌ったよ。それと同じくらいに、ユーリは貧しい仲間たちの間で愛された。ユーリは切り出す石にさえ困るほどの貧乏ものだ。そんなひどい生活の中でも根性が曲らず、腕を威張らず飾らない、素直で気のいいやつだった。仲間は、彼が本当に、石を知り、山の精霊に愛されていると信じていた。

そういう次第だったから、毎日かつかつの暮らしはしていても、ユーリはなんとか生きていけた。

だがあるとき、ユーリは監督に呼びだされた。鉾山の監督にだよ。そのころはみな働く人々は、支配者の奴隷みたいなものでな、農民

も労働者も、その土地を支配する領主や皇帝ツァーレの持ち物だった。支配者たちはな、人々を管理するために、工場や農場全体を見張らせるための監督をつかわし、管理させたのさ。監督にはものすごく権限があった。しかも領主は、冷酷で優しさのかけらもない人間を送りこんだ。何でもできる力を持った、自分のことしか考えん人間が、どんなにひどいことをするものか。

ユーリのいた鉱山の監督ときたらその中でも極めつけでな。犬のように人々をこき使い、金を搾り取ることだけを考えていた。帳簿の類は監督に任されていたから、彼は、工場で作られる実際の細工物の量をごまかした。職人衆に作らせれば作らせるほど自分の懐に入る金の量が多くなるわけだ。それだけではない。監督はな、職人達に払う金も搾り取った。文句などいわせんさ、文句をいうものは領主の衛兵を連れてきてな、したたかにぶちのめすか牢獄に閉じ込めた。鉱山の奥深い、水の滴りおちてくる、背を曲げなければいられないほど狭苦しい岩の牢獄にな、三日四日、食べ物を与えられずに閉じこめられたなら、よつばどへその曲がった人間だって音を上げるものさ。

そんな人間に呼びつけられたものだから、ユーリはおびえあがった。しかし逃げられるわけでもなし、彼はひどくびくびくしながら、監督のいる部屋に入った。

するとな、監督は、こんなやつが何を作り出せるのかというような目で、じろじろとユーリを眺めてな、「おまえの作った細工物を、ここに出してみる」と、机の上を鞭で示したものだ。哀れなユーリに何ができるね？ おとなしく彼は、ポケットの中から、孔雀石の石榴を出して、かたい机の上に置いた。

それを監督は指の上に乗せてしばらく見ていたが、ユーリに向きなおるや彼は、「机の上に指を出せ」と命令した。ユーリが机の上に手をつけて指を広げるとな、監督は言ったものさ。

「さてとな、おまえが何を作れるか、おれはよくしらべている。くず石や、なんでもなような孔雀石の塊から、目も眩むような細工

物をつくりだすんだとな。まして、俺はおまえのうでまえを自分の目で見ただけだから。嘘はつくなよ」

こう、おどしておいてから、監督はどうしてそんな細工物が作れるのか、秘密について問いただしたもののさ。ところがユーリは到底そんなことにはこたえられない。うまい受け答えでごまかすことができる人間でもない。どもりながらいつもどおり馬鹿正直に答えたものだ。監督は鼻で笑った。

「石が教えてくれるだと？ 馬鹿を言うな！」

突然恐ろしい声で怒鳴り、がんと机を蹴とばすと、さらにわめいた。

「いいか間抜けめ。立場をわきまえろよ。石が喋るわけがなからうが！ 光ろつが石はしゃべらん。おまえが勝手に思い込んでいるだけだ！！ いいか！！」

監督は、ユーリの作った細工物を握るや、それをユーリの鼻さきにつきつけた。

「わしは聞いているぞ、工場の細工物の職人連中が言っていた。おまえは、どことなく石からでも、国王の王冠につけるような細工を作ってみせると、ことあるごとに吹聴していたそうじゃないか。さあ言ってみろ、どうやっておまえはいいものをつくるんだ？ 言え、さもなければおまえの指を一本つつ切り落すぞ！」 さあ、えらいことになった。ユーリの頭の中で、言ったこともないそんなはなしがどこから出てきたのか、どうして説明しようかと思っただが、舌が馬鹿になったように動かない。頭の中で国王の王冠の細工さえ作ってみせるといふ嘘の言葉が数珠つなぎにぐるぐるまわるだけだ。

もうユーリは必死になって、何か言葉を出そうとするが、そんなときに限って言葉が出てくるはずがない。監督は怒り狂って責めた。そのときようやくとユーリの喉から言葉が出てきた。

「監督、おれは頭のわるい人間だから、とうていそんなこと口で言えるものではないです。神様にかけて。ただ、おれは作るだけです。監督の、なんでもお望みのものをつくりましょう」

「ほう。そうかそうか」

監督は急ににやにや笑い出した。ぎとついた油がしみだすような嫌な笑顔で、優しい声を出したもんだ。腹のうちでは考えを変えて、『こいつが馬鹿で何も言えんなら、しかたがない。まあいいさ。こいつに作らせれば、それでも用は済むからな』と思っていた。そして、この職人に、ためしに何か作らせる気になったのさ。

「ふん、そうか。おまえが心を入れ替えるなら、領主さまのものである石を使って、細工物を勝手にこしらえたばかりか、自分のものになっているのは、赦してやろう。ただし、おまえが何か新しい細工を作り、わしをうならせんかぎりおまえに自由なぞないからそう思え」

監督はユーリの作った細工物を取り上げ、兵士を呼びつけた。屈強な兵士が二人、すぐにとんできた。部屋に入るや監督の前に直立不動で突つ立って敬礼した。

「こいつを鉱山の穴に閉じ込めておけ。道具と石と、ほかの必要なものだけをいっしょに入れる。何か作らんかぎりパンはやるな。飢えようがほうっておけ」　そういうと、犬でも扱つかのようにユーリを部屋からつまみださせたものさ。

監督はまるきり人間も言葉も信じちゃいなかった。まして力もない貧乏人なんぞ、何か口で命じるより蹴とばした方がはるかにものわかりがよくなると信じていた。人が自分の振る舞いで死んだところで、知ったことではなかったのだ。そしてそういうことがな、まかり通る世の中だった。

貧乏な仲間たちは、ユーリが、鉱山の奥にある、岩穴の牢獄へ放りこまれたと知って、青い顔になった。だが、どうすることもできない。なにせ、監督は蛇のようににずるがしこかったから、職人の間にもな、自分に忠実な者をまぎれこませていた。

貧乏や辛さから逃れ、一人だけいい目を見ようとする人間は、今でも昔でもな、どこにでもいた。臆病な人間もいた。どうしようもない理由を抱えた者も、やっぱりたくさんいた。監督はそんな人間

の裏、弱みを見てとり、金をやつたりおどしたり、甘い言葉で釣ったりしてな、何か不穏なことがおこればすぐ密告するよう、てなづけておいたのさ。監督はただ粗暴なのではなく、ぬけめのない人間だった。偉い人間ほど、多くの物事を、いつでも知っておかなければならない、というのをよく心得ていた。そして職人どうしがお互いのすることを疑い、蛇のようにいがみあつていてくれれば、監督にはつごうがよかった。

だから貧乏な仲間たちには、うっかりものなど言えるはずもなかったし、まして、ユーリのために何かたくらむことなど、夢の中の話にすぎなかった。ユーリもそれを知っていたから、仲間が助けに来てくれるなどという甘い考えははじめからなかった。ただ、水の滴るあなぐらの中で、かぼそい油の燃える火を見ながら、ためいきをつきつき、彼らもひどいことになっていなければいいがと思うだけだった。自由なところにいる仲間をうらやんだりしはしなかった。ユーリは貧乏暮らしでもとも何も持っていなかったから、山の外で、何も奪われることはなかった。ユーリにとって何もないところにあつたのは仲間だった。だからユーリはひどい境遇でも、強い草の根のように素朴に仲間を信じていられた。

ユーリの閉じこめられたところはな、またひどいところだった。

ユーリは、今となってはもう使われていない、古い鉱山の奥深くに放りこまれていた。そこは先の崩れた坑道に鉄格子をはめた、それもあちこちから地下水が染み出てくる穴でな。乾いたところなんぞどこにもなかった。天井はせまく、立つと背中がつかえるようなところだった。

こんなところで、ひとが思うようにものをつくれるかね？ ユーリだって何もつくる気になぞならなかった。ただ、生きるために、しかたなし、原石を磨いて、孔雀石の板に乗せてみたり、組み合わせてみたり、やすつてみたりしたが、さんざんなものしかできやしなかった。監督は鼻で笑うや、腐った魚と石のようなパン切れしか与えなかった。

生きるのに最低限なものしかなかった。監督は細工を作れといっておきながら灯火さえもろくに与えなかった。燃える油がなくなれば、即座に、どこよりも深い闇と静寂が、岩穴をつつみ、ユーリをうちのめした。ユーリにとって最初の二日三日は、暗闇は恐れるようなものではなかった。だが、時間がたつにつれて、感覚がどこまでもどこまでも、深淵に吸い込まれていくような、そんな恐怖が彼の神経を襲った。もう、暗闇は粘りつくような恐怖だった。感覚を失い、暗黒の深海をどこまでもただよい落ちていくような、得体の知れない虚無にさらされていた。神経が耐えられないような押し詰まる圧迫に耐えかねて、ユーリは絶叫した。地の底でただひとりきりしかいなかったから、いくらさげんでもだれにも届かなかったが、彼は狂ったように咆哮し続けた。やがて喉がかれて叫べなくなった。ユーリは、獣のように膝を抱え、自分の心を守るために必死になった。朝が来ると、衛兵が灯火をつけにきた。灯りの火をかかげて彼らは、きたないものでも見るようにユーリをのぞきこんだ。灯りがともると、ユーリは目をさまし、のろのろと心を浮かび上がらせた。凍りついた神経に火の暖かさが染みとおると、彼はまだ生きていたことをなんとか知るのだった。そこはもう、人の生きる価値などさしてなくなってしまったようなところだった。ユーリはものをたべることをすらやめてしまった。最後にはもう、衛兵たちはユーリにかまうことなどしなくなった。油を足して火をつけることも、パンを与えに来ることもやめた。

ただ、うち捨てられた深い深い地の底の穴の中で、ユーリは倒れていた。どのぐらい倒れていたのだろう。

いつか、ユーリは心を守ることをやめた。深い水に引き込まれるように自由になった。そのとたん、ユーリには、周囲の岩たちが、ささやいているのが聞こえた。すつと溶け去るように、ユーリの心が、水に消えてなくなるように、何もかもと同じになった。雪から溶けた水の一滴が、水面に落ちたそのときに、全てと一っしょいになるように。それは、ユーリが地上にいたときには、ごく稀にしか、

しかも神経をすりへらして石を眺め続け、考え続けた後の一瞬にかやつてこない感覚だった。今それは彼の中に渦巻いて流れていた。もしかすれば、死に瀕した間際のできごとだったのかもしれない。ユーリは、手に、石切の道具を持ち、ふらふらと身をおこした。周囲に何かがあるか彼にはわかった。灯火があるうちに必死になってまわりをながめていたからだ。灯火のある光景こそ、彼の心を持ちこたえさせるよすがだった。だから火のひとしずくが消えるまで、ユーリは石の全てを目に焼き付けていた。箱の中につめられた石の一粒一粒すら、その輝きと色のままに彼は手にとり全てをただしく並べることができた。

石たちはだまっていなかった。我先にと彼に訴えかけた。形を教え、どこを削るかを教え、どうはめこむか、何を作り出せばいいかを彼に伝えた。ユーリはただ、石たちの叫びを全てききとって、丹念にそれを形にしてやるだけでよかった。震える指先は、しかし、細工をこしらえるときには、鉄でできているかのように正確に、精妙に動いた。ユーリの中に再び熱がこもった。はげしくたぎる作り出す何物かが、ありえない形を暗黒の中に描き出した。指先がそれを追いかけた。石をやすり、削り、磨いて、意のままに緑の孔雀石の板と組み合わせた。全てが完成したとき、ユーリは深い闇の中に、安らかに抱かれて沈んでいった。

2

ユーリは再び目ざめた。それとも夢の中で目ざめたのかもしれない。飢えや狂気のせいで、ユーリは、頭の奥に、薄い絹の幕でもかかっているような、ぼうつとした気分だった。ともかく彼が正気づいたとき、どこかからか、緑の微光がさしていてな。ユーリは、目を細めて、不思議な光をじっと眺めた。

見つめているうち、目が慣れてくると、それが小さなトカゲの輪郭をしていることに気がついた。光は、トカゲの体から出ていたのさ。その奇妙なトカゲは、明かりをだんだんと強めているようだな。そいつの伏せている床や、そのまわりの壁まで、ほのかな緑に浮かんで見えてきた。トカゲは、倒れているユーリの顔をじつとながめていたようだったが、やがてちよろちよろ走り出してな。ユーリは寝たままゆくえを見ていた。するとそいつはすると奥の方へ走っていく。見つめるユーリは驚いた。閉じ込められている坑道の、落盤しているはずの奥の方が、ほんのすこし崩れてすき間が空いていたのさ。トカゲはその奥へ這いこんだ。ユーリも、よろよろといざって、その崩れにできたほんの小さなすき間をくぐりぬけ、ずっと奥へと這い出した。

緑に薄く光るトカゲは、ユーリを導くように進んでいく。すばやく走っては、ぴたりととまり、じつとユーリを見つめる。

あたりは、まるで井戸の底のような静けさに包まれていた。だが、床はかわいていてな。地下水の染み出す今までの坑道とは少しちがうことにユーリは気がついた。

さきほどから、どこから漏れるのかわからないごくわずかな明かりがあった。それをたよりに、ユーリはゆつくりと膝をつき、はいずっていった。そんなところでも細工物だけは、どうしてか、しっかりと抱えてな。彼は自分の作りだしたそれが良いものなのかどうなのかすらわからなかったが、しかし固く抱きしめていた。飢えて衰えたユーリにとって進むのは難儀なことだった。やがて足がどうにか歩き方をとりもどしてな、彼はよろめいて、壁に手をつきつき、ようやくと歩いた。

進んでいくうちに、石の燐光があたりを薄明るく照らしたし、ユーリは坑道の中を眺めることができた。雪の国で、春のおとずれた深い谷では、降り積もった雪の下を流れる水が洞をあけることがあるが、そんな深く長い洞穴の中にいるようだった。目が慣れて見回せば、そこは奇妙にまっすぐで、どこまでも同じ高さとお広さの洞穴

だった。ユーリは、まるでひとが作った地下通りにいるような感じを受けていた。床はでこぼこしておらず、滑らかで磨きこまれた廊下のような。しかしおかしなことに、まるで人の手の加えられたようすはなく、ノミも刃もあてられた跡がなかった。壁は、魚のうろこを重ねたようにつるつるした、流れるような紋様が一面に広がっていた。こうした形は、美しい曲線を持ち、一つとして同じ大きさや同じ線がない。しかしその全ての中には、一つの自然の形にのっとって作られるおなじさがあった。

まっすぐにまっすぐに道はひろがっていた。どこまで歩けばいいのやら見当もつかない。しんと静まり返っていてな、ただ、進むにつれてな、ぴちよん、ぴちよん、こぼこぼと、水の滴ったり、流れ走る楽しいげな軽やかな音がはじめていた。トカゲはするすると走っては先を促すようにユーリを待っている。

ユーリは壁を見つめた。燐光がずっと強くなっていたからな、壁には、筋の入った白水晶や青水晶の鉱脈が走っているのがわかった。鉱水が、亀裂の向こうを走っていく音がする。

石英を豊富に含む鉱床を歩いているのだとユーリは思っていた。さらに進んで、床や壁に縦横に走る透明な水晶の鉱脈に目をこらしたときだった。のぞきこんだユーリはおどろいた。ぼうつとした燐光に包まれて、おどろくほど大きな景色が、その鉱脈の向こうに広がっていた。海中か、湖の中かと思うほど、巨大な水の空間がそこにあつた。洞穴の外は、暗闇の鉱水がすべてを満たしていた。岩床が、燐光を放っている。よくみれば、雪の結晶のような、石の組成が輝いていた。

ユーリが今まで歩いてきた洞穴は、天然に生まれた大きな石英の通廊だった。分厚い石英の頑丈な套膜が、彼の歩いている天然の通廊を包んでいた。そして通廊はな、水の縦穴の中をまっすぐ貫いて通っていた。ユーリは歩いて、さらにのぞけるところから、外の様子を見ていった。

水晶の管が、水坑のはるか巨大な内壁を、曲がりくねり、分かれ、

合流し、縦横に走っていた。やさしい水音を立てていたものはすぐにわかった。底知れぬ岩床のはるか深みから、小さな泡が絶え間なく吹き出し、ゆらめいてまた、どこもしれぬ暗黒の高みへのぼっていくのを、ユーリは驚きの目でながめた。

洞穴は、すすむうちに、また黒い閃岩にかわつたり、青みを帯びた蛇紋岩になつたり、堅牢な花崗岩になつたり、またおそろしく透き通つた本当の水晶だけになつたりした。そんな透きとおつたところを通るときにはな、ほんとうに黒くろとした深淵の深みへ足を踏み出すんじゃないかと、ユーリは、おっかなびつくり足先を探りながら進んだものさ。あたりからは燐光が湧き上がっている。青白い光ははるかに続き、洞穴の外は本当によく見えた。

通路が無数に空間を貫いていた。はるか遠いむこうまでのびていく。それらはきれいな流線を描いて、水坑のはるか先へと集まってくる。そして一本一本が束になり、房になつてな、向こうの方ではまるで花のめしべを思わせた。それは寄り集まり、根元まで行くとき大きな花びらに似た岩の重なりを覆い隠すほどだった。ユーリはそのありさまを見て、短い夏に咲くウラニアの花を思いだした。それはまた、祭りで、地面に置いた花火が、青白い火花を吹き上げているような、壮麗な姿に似ていた。

ユーリは、歩くのがさほど辛くなくなっていることに気がついた。下りになっていたのさ。自分の歩いている通路も、どこか知らないその一番奥へと向かっているのだとわかった。先を行くトカゲも数を増やし、ユーリのそばを駆け走って、ちよろちよろ先へ進んだり、首を鋭くあげてユーリを待ったりしている。そんなありさまを見ているうち、ユーリはあまりにも自分の今いるところが信じがたくなって、どうもふわふわ、宙を歩いているような気持がしてならなかったが、そのまま進んでいった。そのうちに、ユーリは通路から、大きな広間みたいな場所へ出た。

そこはまっくらだった。ユーリの靴音があたりに響き、跳ね返り、消えていく感じが、教会の聖堂に入り込んだようだな。ユーリはも

のすごく広いところに、ふらふらと踏み込んだのではないかと思つたものさ。ぼうつと光っていたトカゲたちも、そこから先に入ると、光を弱めて消してしまった。

足先をさぐりさぐり、ユーリはおっかなびっくり歩いていった。すると、くすくす笑うような音がして、誰か、なにかが、彼のまわりをめぐるような気配がする。

「だれだ!？」

ユーリは勇士でもなんでもない、ただの細工物の職人だ。勇気が特にあるというわけじゃないから、まるでその声は震えておびえていた。

すると、ちよんと、誰かの指先が、ユーリの唇に触れた。冷ややかな爪の感触におどろいてユーリが顔をひくと、ささやく声がきこえた。

「石の花に命じなさい、石の花に命じなさい」とな。その声は笑いを含んでいた。若い女の声だ。冷たく低い声の調子だったが、うれしげにいたずらをしている、はなやいだ感じが声音から伝わる。

「何をだね」ユーリはあわてて問い返した。

「おまえの望むものを」

さてユーリは、こんな山の奥深くで、しかも女の声など聞いたものだからひどくびっくりしてしまつたが、しかし頭の隅では、これは鉱山やまの姉様にちがいないとはつきり勘づいた。

鉱山で働くものなら、鉱山やまの姉様といえは、だれでも知っている。鉱山をつかさどる、山のあるじだ。きまぐれな、恐ろしい精霊だといふものもあれば、厳しいが正直者には優しいのだと、あるものはいう。人を助けることもある。だが一瞬で大きな地震を起こし、坑道の中の人々をその奥深くうずめてしまう、恐ろしいこともする。強欲な鉱山掘りがいて、石を果てしなく欲したならば、必ず姉様はしかえしをする。だがときには、人の形をとり、気に入った者と暮らすこともある。鉱山ではたらくものの間では、そう語りつがれ、信じられている。しかし鉱山の姉様の心は、人には量れなくてな、

恐ろしく、近づきたいものであると思われていた。まるで自然そのもののようにな。嵐や洪水に目的があるか？ それとおんなじことだ。鉾山の姉様はな、そういうものだった。

これはえらいことになった、とユーリは思った。しかし、あの死の岩屋から抜け出してこられたのは、この姉様のおかげではないかとも思った。山の主なら、トカゲを遣わし、岩屋の隅っこにちよいと穴を開けるぐらいなんでもないことだ。

「姉様、」と、ユーリは言った。「ちがっていたらまったく申し訳ないが、しかしここには灯りがないので、何も見えずわからないです。どうか、もうちよつと明るくならないものでしょうか」

「いいでしょう。ならば、明るくなれ、と命じなさい。その腕に抱いている石の花へ」

ユーリはためらった。だが、びくびくしていてもしかたがない、と心に決めて、物語の中の人にもなったような気で思いきって声を飛ばした。

「明るくなれ！」

とたんに、胸から炎でも噴出したかのように、白い光が激しく踊りだした。まるでなにか、雪解けの奔流が流れ出るように、あらゆる方向へ光がほとばしり飛び散った。おどろくユーリの抱えているそれは、さらに強く光を放ち続けた。目にはおそろしく耐え難いほど眩しかったので、ユーリは思わず顔をそむけ、やがてそれでも耐え切れずに、それを高々と頭上に掲げた。

石の花から放たれる光は、大聖堂のように巨大な空間を、強く波のように揺らめきながら照らした。ごりごりと、いや、音まで出さなかったのだが、声を出さずおどろくのように、岩でできたその広間はこころもち揺れるようだな、ユーリの石の花はやがて明るさを落し、冬の午後の太陽のようにやわらかい光になった。

ユーリはようよう、薄目を開いてあたりをみまわした。そうすると、そこが大聖堂のようだと感じたのは、あながちまちがいでなかった。見るとな、まるで、大きな城のように立派な、岩でできた

広間だった。岩の館だったのさ。もちろん人の作ったようなものじゃない。岩の裂け目で作った天井、流水が磨きだした平滑な岩の壁に、地熱で溶かされた大理石の床、巨大な柱列、石段に飾り台、全てが丸みを帯びたふしぎなものだった。そして、あらゆるものに飾りがほどこされていた。川原に行けばわかることだが、自然は直線をきらうし、おなじものは作らない。それとおなじように、姉様の住まう岩の館にはな、人の手が創るような意匠はなかった。そして二度おなじ意匠を凝らした飾りはなかった。うるこのような、ゆるめく水の筋のような、そういう紋様は、あらゆる職人が作り出す意匠よりも華やかで多彩だった。

しかもな、大広間は、ユーリの持つ石の花の光をたっぷり吸いこみ、その光を、それぞれの場所が含んでいる鉱物の持つ組成にあわせ、ちよつとずつ色を変えながら、輝きはじめた。ユーリが呆然としながら辺りを眺めているとな、岩の大広間は、その天井まで、さまざまな石の光を放ち、夜の星のように結晶層を輝かせた。やがて奥のほうまでもすつかり明るくなった。

ユーリはもうおどろいてあたりを眺めてばかりいたが、ふと気がついて姉様を見た。なんとも恐ろしい美人だった。すらりと背が高く、深い緑色の衣を着けていた。髪は長く、深い闇のように漆黒だった。顔立ちは整っていて、ユーリは強く引き込まれた。一目見ただけで焼きついて目をそらせなかったが、それでもやはり、その顔立ちには、どこか常の人の雰囲気とは異なるおぼろな違いがあった。翠の瞳の奥の、闇の深さが、ほとんどはかり知れなかった。

「やっぱり姉様だ。トカゲをつかわして俺を助けてくださった」ユーリはつぶやいた。

さて、石の花を抱えて、間抜けみたいにぼうつと見とれて立ち尽くしているユーリが、姉様に目を丸くしていると、姉様はふたたび言った。低くて静かな声だったが、あたたかな声だった。

「そう、私はこの山の主。ここまで来られるような人間は、稀にかいない。石に好かれていない人間は、あの通廊を通り抜けること

はできないのだから。おまえは大変な目にあってきたようね、ゆくり休んでいきなさい」そういうとな、姉様はすすと歩いてきてな、ユーリの手をとって先に歩きはじめた。小さなトカゲたちもちよろちよろと走ってついてきた。

ユーリと姉様は、大広間を出て、長く、天井の高い廊下を歩いていった。きらきらと、宝飾のように、鉱物が輝く。姉様の手は温かくてな、ユーリはぼうつとしながらひかれていった。角をいくつか折れると、いい匂いが漂ってきた。部屋にはいるとおどろいた、大きくて分厚い石の台座でできた長いテーブルの上に、ごちそうが所狭しと並んでいる。

もう我慢できはしない。なにせ、坑道のあの狭い穴倉に閉じこめられて長い間、ユーリはまともなものを何もたべていなかった。ごちそうは山のように並んでいてな、山羊の乳を煮込んだスープ、コケモモの実を干して煮付けたジャム、清流の中に住んでいる魚を焼いた串、うずらやひよどりの焙り焼きだの、鹿の肩肉の脂が垂れるまでこんがり焼いたのだとか、とびきり珍しい猿の酒、そのほか山で採れるありとあらゆる菜やきのこや果実がふんだんに盛られている。ユーリは胃まで驚いて食うことも忘れてな、しばらく見回しているばかりだった。夢か現か、迷っていたが目は覚めず代わりに胃が覚めた。いい匂いがしてたまらない。ユーリはスープにとびついた。

長いあいだ、ろくに食わずにいると胃がちぢんでものを受け付けなくなる。そんな状態で食物を詰め込むと弱った体に無理がかかって死んでしまう。だがそのテーブルにやらんでいたのは不思議な料理ばかりでな、食べるとすぐに体を癒した。ひよろひよろの体に染み通っていくようだった。水を飲めば疲れが消えだし、肉を食べればへたりきつた筋に力が戻った。スープを飲むとくらんでいた目がしやつきりと元に戻った。むさぼるようにあらかた食べ終え、そのまま安心したのか、ユーリはテーブルに突っ伏して、とろとろと眠ってしまった。

まったく安心しきって眠ってしまったとな、人間何も気づかず、深い闇の底で沈んでいる石のように心を落ち着かせている。ユーリの場合もそうだった。本当に深い眠りだったから、誰かに呼ばれて目覚めるときにも、遠くから、水底へと声がようよう響き、自分のことをかすかに思い出させるような、そんな漠然とした不安がユーリを包んでいることしかわからなかった。声は、だんだんと大きく響いてな、ユーリは、ああ、誰かが自分を呼んでいるんだな、ということがわかったときにぼんと目が覚めた。部屋を照らす白く柔かい光の中、姉様が、ユーリのかたわらに腰かけていた。

「ずいぶん眠っていたわね」

そう言うのと姉様は微笑んだ。それはな、実は、ひどく長い、長いねむりだった。姉様は、疲れ果てて眠りについたユーリを、この部屋に休ませて、長いこと、目覚めるまで見守ってきたのさ。そして今日あたりは、目覚めるのではないか、そう姉様は、ユーリの顔を眺めていたところだったのさ。

ユーリは、自分がすこし風変わりなベッドに寝ていることに気がついた。石でできたベッドだった、しかしなんとも柔らかくてな。手元を見ると、厚くて吸い付くように密な緑の苔が生えて、上等のふとんのようになっている。ユーリはすこし妙に思っただけをとおすと自分の恰好を見回した。服が色褪せて擦り切れているように見えた。だが体は、なんともない。むしろすこし、背が高くなったような感じさえユーリにはしたもののさ。

「姉様。おれはどのくらい寝ていたんでしょうか」

「三年」

そんなにも長く、眠っていたのかとユーリは驚いた。半信半疑で立ち上ると、たしかに服も靴もぼろぼろになっている。もともと粗末な服だったのだが、強い日に晒され続けたようなひどい痛み具合だった。

「こんなになるまで、どうして眠っていたんだらう」

ユーリは呆然としてひとりごとのようにつぶやいた。ユーリの額

に手を当て、仕度をととのえないといけないわね、と姉様はつぶやいた。

「あなたはちょうど良いだけ眠っていたのよ、ユーリ。冬を越す木々の芽のように。さあ、広間へ行きましょう。三年のあいだに、何が変わったのかを教えてあげる」

その前に、姉様は軽く石の床を叩いた。するとな、どこからともなく、うつすらと緑色に光るトカゲが二匹、ちよろちよるとあらわれてな、姉様を見上げた。

「広間に服を用意しておいで。まっさらで新しい、立派な服を。それに上等の石を。道具は要らないから」

ユーリはベッドを出た。長いあいだ眠っていたけれども、四肢は軽く、なまっているところなどどこにも感じられなかった。

部屋を出て、姉様はまたすすと先を歩いていく。こころもち背の高くなつたような気のあるユーリもついていく。ドアをくぐり、階段を上る。晶質の光がまばゆく輝く廊下を先へ進んで、ねじれた木々の幹のように巨大な鍾乳石のアーチをくぐった。そこは、空地から木が生えている庭のようだった。広い円卓のようなテーブルが並び、天井から、水晶の様に透き通って白い、石膏でできた結晶の森が伸び生え、床からも、大きな幹ほどもある太い結晶が、鋭い晶面と幾本もの複雑な分岐を作って、あたかも樹木のようなようだった。

近くの、低く横に広がる石膏の結晶に、服がかけられていた。

こざつぱりとした服だった、背丈も長さもぴつたりとユーリに合っていた。姉様はそれをユーリに着せ、テーブルを示した。

「見てごらんさい、ユーリ」

大きい、特に何の模様もない、さらの緑の孔雀石の塊だった。ごく普通の石のようにユーリにも見えた、がユーリはしつつかと目を凝らした。渦巻く紋様が石の中に透けて見えたからだ。その、力ある波紋のように回転する紋様が、その石に宿るそのものの形が、丁寧に切り割られ、開かれ、掘り込まれて磨かれるその時々の可能性のかたちであることをユーリはわかった、それだから彼は吸い寄せ

られるように石をつかんだ。そして額を石につける、そのときにもうその孔雀石は、花の形をとってそこにあるよう、かたちづけられていた。模様は内側に完璧に存在していた。ユーリは、いつも持っている鑿をポケットから取り出すと、軽くタガネで叩き罅を入れ、払うようにいらぬ箇所を取り去った。それだけで、見る見るうちに石の花がそこに出来上がっていった。鋭い面が切り出され、条が刻まれたそこには、渦巻く紋様が鮮やかで生き生きとした花のひとひらひとひらになってあらわれていた。たいした時間もかからず、そこには切り出したばかりの細工物が出来上がっていた。台形のひとつひとつの面に、自然の作り出した流紋が花になって現れていた。しかしやっぱりユーリには、そんなことがどうしてできるのか、さっぱりわからなかったよ。だが姉様はその様子をとて真剣に見つめていた。

「ユーリ」姉様はな、瞳を閉じて厳かに告げた。

「あなたは石を心から愛して、石に好かれて、だからこそ、あなたをひどい目に合わせたあの強欲な監督を、追いはらうかどうか、決めることができる。あの男は、私自身である山を、精髓のかけらもあまさず掘り尽くし奪い尽くすまで、容赦なく人々を駆り立て、荒らし続けるでしょう」

姉様は、とても美しい、そして恐ろしく深みのある眼をユーリに注いだ。深い井戸のような、静けさを秘めた眼差しだった。

「あなたにしてみらいたいのです。私が怒れば、ひとゆびで山を揺らし、坑道を埋め、水を噴き出して人々を追いはらうことができます。しかしそうではなく、人にもしてもらわねばならないのです。あなたなら、その理由がわかって？」

「姉様。おれは、姉様が好きだ」もともと、照れてユーリが答えたさ。杭が畑に深く打ち込まれてるみたいに突っ立って、耳まで真っ赤にしてな。そして、続けた。

「だから姉様も、おれや石の好きな者たちが好きだ。だからだ。おれに皇帝みたいな力があつたらなあ！ 決して監督みたいな汚らわ

しい人間になど、これ以上好き勝手に掘らせたりさせないのに」

嘘偽りのない言葉だった。聞けばわかる、それは横暴や理不尽に耐え続けてきた人間の、心からの力が押し出す切実な声音だった。姉様はそつと、自分の胸に手を当ててな。それからユーリの手をとると言った。

「……そう。嬉しいわ。」

二匹のトカゲが、あなたの供をします。鉾山の監督のところへ行き、細工をつくって見せ、監督に自分を雇うよう言いなさい。心配しないで。わたしも、山を降りて、あなたについていきます」

姉様はそう言って手を下ろした。ユーリはたずねた。

「姉様、でもおれに何ができるんですか？」

「それは聞いてはいけない。知らないことは、だれも聞き出せないから。大丈夫、トカゲについていきなさい」

姉様はそういうとすつと腰をかがめてな、とんとんとこぶしで床を叩いた。さっきの二匹のトカゲが、鳥の影でも飛ぶように素早く走り来て、姉様を見上げた。緑のうろこが、ぴかぴかと光った。

「ユーリを水の間案内なさい。監督にユーリが誰だかわからないようにするのですよ」

二匹のトカゲはちよろちよろと走っては止まり、ユーリの顔を振り返っている。ユーリがあとを追いはじめると、トカゲ達は前をつかずはなれず歩きはじめた。ふりかえると姉様は、闇の廊下のずつと奥へと歩いていった。

ユーリがトカゲに連れられて歩く暗い廊下は、やがて下へと向かってな。ゆるく螺旋を描いて山の芯へと降りていくようだった。そこは古い大地の、まだ誰も手をふれたこともない穢れのない岩が、年を経て貯えた力が静かに漲っていてな。眠っているように静かだ。耳がきいんと遠くなるほど何も音などしないところだったが、ユーリは、巨人が安らかにまどろんでいるような感じを受けた。

深く降りていくうち、水が床を流れはじめた。澄んだ、冷たい水の流れだった。進むにつれ、長いこと流れ続ける水は床を穿って網

目のようにくねり進む水路を作っていた。滴る水が集まり、通路は幅の広い小川の流れと平らな飛び石に変わった。そして、降りきったところに出るとな、そこはどうどうと、大きな水流が、さらに地底の奥深く、どこもしれない深淵へ流れ去る音がひびいている、大きな川になっていた。砂利がさやさやと水に揺れて光っている。ぽうつと、天井まで優しく薄い黄緑のかった光が、波紋を作って揺れている。

トカゲはちよろちよると水の流れのきわまで走ると、ユーリの顔を見上げた。ユーリはふと喉が渴いたのを感じて、ざぶざぶと水を掬い、喉をつるおした。それから顔や髪に水をかけ、目まではちぱちと洗い清めた。するとな、水をかけるたびに穢れがぬぐいさられ、長く伸びてごわごわの黒い癖毛が、真つすくな髪へと変わった。ユーリが驚いて頭や顔に手を当てると、あばたがほうぼうに浮いて散々な顔だったはずなのに、つるつるとした手触りの、赤んぼうのようにすべすべの肌になっている。

ユーリは流れのおだやかで水面の静まったところに顔を映してみた。自分でも自分を見て驚いた、よっぽどユーリと親しくなければ、つまり親か兄弟がまじまじと見てみなければユーリだと気がつかないほどの変わりようだった。ユーリの黒々として縮れた、カラスの巢みただった頭の毛は、ふさふさとしてよく光る白い長い髪になっている。顔は三年のあいだに引き締まっていた。顔中ひどかったあばたが消え、黒い目は灰水晶の色になっていた。

まるで変われば変わったものだ、そう言ってユーリは声も変わったのを知った。まるで冴えないどもり声が、いつのまにか歌でもうたえるようなよくとおる澄んだ声になっている。

これなら監督には決してわかるまい。

そう思いながらユーリは、再びトカゲが歩きはじめた後につき、ほの明るく結晶の光る闇の中を進んでいった。

ユーリがいなくなった三年のあいだに、鉾山の工場はな、相変わらずひどい有様だった。監督はあわれな職人達を怒鳴り、鞭を振りあげては威し、罰ばかり与えていた。そして少しでも手向かおうとする者がいたら、即座に坑道の穴倉にほうり込んでいた。

そこまでなら今までとあまり変わらん。ところが監督にとって鉾山ごと揺すぶられるようなことが持ち上がってな。皇帝が、国中の鉾山の領主に、命令を出したのさ。皇帝はな、大事な姫の婿が決まって大喜びだった。それだからその引き出物に、石や金銀の鉾山ひと山につき、今まで見たこともないような立派な細工物を作ってこい、と言ったのさ。

領主も、とびきりいいものを作れ、名誉にかけて金も手間もかけたやつを持ってこいと監督に命じたわけだ。ところがところができあがってくる細工といったら、どれもこれもおぎなりの無様な代物ばかりでな。

なに、いままで細工の出来不出来なんて監督にはどうでもよかった。監督にとつちや細工の多寡と値が全てで、その値にしたって大体のところ、相場は材質と量で決まるものだった。何が彫られていようが、どう細工が尽くされていようが、監督の目には入らないし、そもそも入れる気などなかった。

だけれどもな、いい職人がいつまでもそんなところではたらくわけがない。猫がいなくなるようにこっそりと逃げ出してしまったのさ。

監督は、それならばいい職人をみつけて作らせるまでだと、金に糸目をつけずに探し回った。だがそうはうまくいかない。そのころにはもう、めぼしい職人はあらかた他の工場に雇われちまっていたのさ。だいいち悪い噂というものは広まるのが早い、監督の工場の金に汚いことといったら職人の間には知れわたっていたから、なおさ

ら人が寄り付かなかった。

さあ、困り果てた監督は、工場の職人たちがいい細工を作り上げるまで、食事も金も与えず、狂ったように働かせた。仕上がらないのは腕が悪いからだ、嫌なら早く作れ、できなければ鞭をくれてやる、とこういうわけだ。だが、威そうが殴るうが、ろくなものなぞできあがらなかったさ。いやいや作るものに本当に良いものなんてあると思うかね？

だから今日も監督は、いがらい煙の出るパイプを吸いながら、工場の奥の自分の部屋で、細工を見ながらいららとつぶやいていた。「馬鹿者どもが。板一枚仕上げるのに何を無様な細工を作っているんだ、これではおれの立場がない」

こぶしを震わせ、そう忌わしげに呟いて、それまで眺めていた細工を机の上に放り出した。そして明日は、職人どもを懲らして、もつときちんとした細工を作らせてやる、と心のうちで苦々しく思っていた。

もう、姫さまの婚礼の日時はすぐ近くだ。なんとしてでもいいものを作らせなければ、監督の面目は丸つぶれで首にかかわる。監督が、じろじろと、不機嫌極まる目付きで空を睨み、酒瓶を掴んだときだった。召使いが怯えた声で監督を呼んだ。

「監督、お目にかかりたいと申すものがやってまいりました」とな。いぶかしむような荒い目で、監督は召使いを睨んだ。

「おれに会いたい、だと？ どんなやつだ」
首をすくめて召使いは、やって来た者について話しはじめた。

「名前はアレクセイ・ヴラソフ。あちこちの工場で雇われてきた、孔雀石の細工の職人だと申しております。ドニエプルの方からはるばる旅をして来た」と

「職人だと？ そういったか？」

「はい、監督。なんでも、この工場が職人を雇いたがっているという噂を聞いて、やってきたと申しております」

「呼べ」

監督はすぐに言いつけた。召使いはすぐに飛んで行って、その旅の職人を監督の部屋へ案内してきた。

会ってみると驚いた。その男はきれいに洗濯された皮の服を身につけ、くたびれたかばんを持っていてな、長い旅をしてきた様子だった。背は高く、すらつとしていて、引き締まった顔に白く長い髪がよく似合うやさ男だったさ。本当にこんな男が孔雀石なんか切ったり削ったりするものか、それよりは大きな街の劇場で歌っている方が似合うんじゃないかと思うような姿だった。

「手を見せる」監督はいぶかしんで手を出させようとしたさ。職人なら荒れてごつごつの手をしているからすぐわかる。

男は笑って、「それには及びません、監督。石を切らせてくださればすぐにわかります。工場はどこですか？」と訊ねたものさ。とろけるような笑顔によくとおる柔かい声だった。思わず監督も、荒く尖った目を丸くしたぐらいさ。もちろんこれが、三年前に、自分が穴倉にほうり込んだまま、行方が知れなくなったユーリその人だとは、監督にはわかるわけもない。なにしろユーリは、目の色まで変わっている。

「そうか。よし、それほどいうのなら作らせてやる。噂を聞いてここにきたのなら、誰のために、何を作るのかもわかっているだろうな？」

ユーリはにっこり微笑んだ。まるで別人みたいなユーリだったが、なあと、着ているものや姿かたちが変われば、人はいろんなことが平気のできるようになるものさ。

「もちろんです、監督。姫君の引き出物となるに相応しい細工を作り上げてご覧に入れましょう」

監督は内心喜んでな。召使いと衛兵を引き連れ、自分が先にたつて石切り場に案内した。行く道々で、大声でユーリにこんなことを言っつてな。

「あと、七日！！ 遠くボルガまで運ぶ手間を考えると、一刻もむだにできないのだ。材料も道具も金も職人も、なんでも好きに使っ

ていい。好きなものを作れ、ただし屑を作ったら容赦せんからな！」

そう言いながら監督は大股でつかつかと歩く。ユーリは案内されるふりをしている。なに、案内なんかされなくたってユーリは自分の職場のことは隅から隅までよく知っていたさ。しかし懐かしいから、行く道の廊下や部屋のあちこちを、なにくわぬ目でこっそりで見回した。ドアの影で、疲れきった顔の友だちが、こちらをうかがっているのとすれちがいさえた、その時には、ユーリは驚いたような顔を一瞬しかけたが、すぐに表情を消して横を向いた。ここで正体がわかったらえらいことになる。仲間はずつむいて、暗く疲れきった顔のまま、背をかがめてそっぽをむいていた。こそこそと持ち場を離れる者もいた。みんな、監督が恐かったのさ。

監督は、ユーリを大きな部屋へつれていった。長くて天井の高い広間だ。長机が並び、職人たちがあちこちの椅子にかけていた。細工途中の石、ノミやヤスリの入った箱なんかの道具が置かれている。「アレクセイ、ここが孔雀石の工場だ。三日まってやる、いいものができたら金をやる。ほしい物があつたらこの召使いを呼んで頼むがいい。だがな、アレクセイ・ヴラソフ。だまそうなどと思うなよ。もしも細工ができなかつたらだ、おれの面目にかけて、坑道の穴倉に閉じ込めてやるからそう思え」

そういうと監督は、衛兵をひきつれ、工場を出て行った。みんなに恨まれているのがわかっていたからあまり長居したくなかつたのさ。

さてユーリだ。彼はな、召使いに、「これから三日間、徹夜で作る。だから、みんな少しでも気が散るといけないから、決して工場の近くに人を近づけないでくれ。のぞいたりしちゃいけない、そんなことをしたら間に合わなくなつて君は監督に、穴倉へほうり込まれるぞ」と言つたものさ。召使いはいわれたとおりにする、と約束した。

そうしておいてユーリはな、「さあみんな、聞いてくれ！」と、

工場中によくとおる、凜とした声を響かせた。職人衆が集まるとユーリは続けた。

「みんな、家に帰れ。あとは僕が一人で作る。大丈夫、監督が僕に、道具も金も職人も、みんな好きにしていっていいと言ったんだ。だから君たちをどうしたって監督の命令ってわけだ。さあ、わかったらみんな家に帰って休むといい」

そんなことを言うと自分は昼のうちからごろんと横になって寝てしまったのさ。職人衆はな、驚くやら呆れるやら、後のことを案じておっかながったりしたが、みんな何しろ疲れ果てていたから、家に帰って眠ってしまった。

本当にユーリはなんにもしなかった。昼じゅう眠り、夕方になっても起きず、深夜になってようやくあくびをして寝返りをうった。虫の声もしなくなった頃だ。部屋の隅で、とんとんと床を叩く音が聞こえた。

闇の中でかばんが緑色にぼうつと光った。トカゲがちよろりと一匹、ふるびたかばんの隙間から顔を出し、すばやく外に躍り出た。賢げに、首を振ってあたりを見回し、ユーリを見つめている。

ユーリはすつと目をさました。緑色の光がどこから漏れてくる。もう一匹のトカゲが、かばんからしなやかな動きで抜け出し、長机の上に乗ってすると水の流れるようにユーリのそばにやってくる。そして、夜もしんとふけた部屋の、闇の奥から、囁く声が近づいた。

「ユーリ、おきている？ そろそろ、あなたの腕が必要なときよ」
「ああ、姉様。……いいつけどおりしましたけど、これからどうしたらいいのか、おれにはよくわかりません。いくらおれでも、引き出物一式全部、三日で作るのは、無理です」

「普通の腕なら。忘れてはいけない、今は私がついています。さあ、トカゲたち、いい石をみつくるって持つてきなさい。まずは冠を作るの、ユーリ」

トカゲはすぐに、石をくわえてやってきた。自分のあたまからし

つばまでありそうな、大人でも背をかがめてうんうん唸って運ぶような大きな石でも、トカゲは軽々とな、がちょうの羽根でもくわえているかのように持つてきたものさ。それを姉様が人差し指でつついた。とんとんと叩くと、石はひとりでに模様をかえた。石に沈潜する渦巻く流紋が、水面の波紋のように広がっては変わっていく。ユーリはそれを見ると何をどう作るか、すぐに見きわめた。何の気なしに石の塊を抱えてな、ちよつと首をひねると、さして気を使うふうでもなくノミをあて、かつんかつんと削り取った。ひびを入れて余計なところを払うだけで完全な細工になった。あつという間のはやわざさ。賭け師がカードでも切るように彫刻や細工が生まれ出る。

一夜たつと、冠がいくつもできていた。大きな、まるでニワトリの卵みたいな宝石がはめ込まれた孔雀石の冠、炎を象った装飾のついた髪飾り、幾重にも螺旋をまいて薄く削りこまれた孔雀石の頭飾り、尖塔のようにとんがった宝冠、球をあしらった冠、月をあしらったもの、水をあしらったもの、花を添えたもの……まるで数知れない意匠が奔放に、自由自在に跳ねて飛び出てきたかのようなだった。もう一夜たつと今度は指輪がいくつもできていた。重厚な大きい石のはまった翡翠の指輪、金銀細工の、細く華麗な蔦草で織られた指輪に実る果実のような宝石、かと思えば素朴で幅の広い孔雀石のリングに、祝福の文字が幾重にも彫り込まれた指輪。そういった細工が木箱いっぱい詰められていた。

最後の夜には、首からさげるペンダントや、胸を飾る宝飾や、腕輪だとか、玉細工だとか、孔雀石の見事な細工が彫刻された箱だとか、そんな工芸の数々が、まるでお手本みたいな良い品の数々がだよ、ずらつと並んでいたものさ。

それはもう、素晴らしい細工の数々でな。長机の上の粗末な木箱の中におさめられたそれらの細工は、光を返してまるで宝箱みたいにきらめいたものさ。とうとう明け方になると、ユーリは最後の細工を箱に落とし、ううんと伸びをした。姉様は、朝の光が徐々に工場

の部屋の中の闇をはらうのを見ていたが、ちよつと扉のほうをむいてな。ユーリに、こつ言つた。

「さあ、ユーリ。もう一つだけ、作ってもらわなければ」

「何をです、姉様」

姉様は答えず、ぎり、と舌を噛んだ。ぷつりと、血の玉が、にじむ嫌な音がした。

「姉様」

ユーリはぎくりとおどろいた。思わず腰を浮かせたものだが姉様はかまわず、瞳を閉じ、顔をゆがめて口もとへ、石を握つた手を近づけた。そうして石へ、べつ、と血のまじつた唾を吐いてな。

それが禍々しく、何か恐ろしいものだどユーリは感づいたのさ。百万の呪いを封じたように石は脈々と黒く、蛇のような流紋を這い回らせていた。白くひびが入り、塩を吹いたように灰が滲み出してな。姉様は唇に滲んだ血を舐めた。

「破壊の花を。これは石と土の悲しみ、さあ」

姉様は差し出し、ユーリは受け取つた。ひどく冷たい石だった。

これにばかりは、ユーリはおそろしくてこずつた。石が、どこからどう見ても、何一つ返してくれない。どう割ればいいかも何を形作るかも。もうすぐ夜明けになる、ユーリはそれこそ焦つてな、目をひきつらせ、とうとう強引に、石を征服するようにして無理矢理に細工を刻んで行つた。荒々しい刻み目と割れたひびが、病的な流紋と血と錆のようなただれ目を持つ石を囲んだ。一心不乱に石を削り、棘のついたがくを切り出した。病んだ花のつぼみだった。

ユーリが我を忘れているとな、がんがんと扉の叩かれる音がひびいた。その音でユーリはあたりを見回した。姉様もトカゲも、いつのまにか姿を消していた。それどころか、驚いたことに朝の光が窓から射し入っている。どら声が響いた。

「アレクセイ・ヴラソフ！ おれだ。監督だ。細工は、できたのか？ すべて仕上がっているか！」

「ええ、できましたとも。いまちよつど終つたのです」

たしかに細工は出来上がった。荒削りだがそれでいいのだとユーリは思った。それがふさわしいものだったからな。

そうしてユーリはなにくわぬ顔で、その石をできるだけ木箱の奥に押し込んだのさ。

細工を、ずらつと並べて確かめて、監督は有頂天になった。三日というもの、いらいらし通しだったから、頬はこけ、目は血走つて尖り、顔色は青白くなって血管が浮き出てきさえた。酒の酔いと煙草の煙でいぶしあげた感じでな、それはもう死人みたいな気味悪い色だった。

「監督、充分な引き出物は作りました。はやく届けた方がよいのでありませんか？」

「無論だ。おまえは仕事を果した。金は、くれてやるぞ。ただし、帰ってきて、俺のいうことをもう少し聞いてくれたらな」

監督は強欲でな、美しさに驚き呆れながらもするすると頭をめぐらして、こいつをおっぱなさずに働かせれば儲け放題だ、ということを考えていたのさ。強欲な人間はどこかそういうものだ、心がいくつにも、小部屋みたいに分かれていてなあ。ここではかなしんでいても、べつのところじゃすっかり計算を尽くしている。それができるのさ。決してひとつ、心から全てをあげて同情したりはしない。全てできあがったそれを、即座に監督は、幾重にも鉄のくさりをつけた重たく頑丈な箱に納めさせてな、四頭立ての馬車に乗せた。領主のところへ出来るかぎり早くもっていくのだ、といいつけてな。そして召使いには工場を任せ、自分と衛兵も馬に乗り、馬車を守つて行く。

季節は春でな。雪解けの水が荒野を果てしない泥海に変えている。そんなところを衛兵の列が進んでいく。人も馬も、コサツクの騎兵のようにひどく屈強なものばかり揃えたのだ。そして監督は自分が先頭にたつて、苦勞しながら泥土の中を、領主の館へ進んでいった。進んでいく途中だった。

顔も服も、黒のベールで包んだ背の高い女が、ひとり、どこまで

も灰色の空と、泥の続く大地に立っただけだ。街道のまん中にたえずんでいた。

声はしわがれていてまるで老婆だった。監督は踏み潰そうとするかのように鞭を振りあげたが、馬は深い泥土に足を抜くのがせいぜいでな、とても突っ走るなんてことはできん。だから監督はいらいらしながら老婆に呼びかけた。

「どけ、そこで何をしている」腕を振り上げ、鋭く振ったものさ。

老婆の声はゆっくりと吐き出され、そしてしわがれ、褪せた花の色を思わせる。震える声と強い難じるような口調が、灰色の空気をふるわせた。

「わたしかね」

ゆっくりと老婆は指を上げて、馬車を示した。

「わたしは姉様だよ。おまえさまの運んでいるものについて話がある」

「姉様だと？ おかしなことを言う婆めが。誰もおまえなんぞ姉に持つてはおらん、どけ！ わしを誰か知っているか。あの、鉾山の監督だ、おれは！」

背の高い老婆は黙っていた、黙り込んだのだと監督は思った。しかしそうではなかった。監督の目の前で、老婆は声もなく笑っていたのだ。

「何がおかしい！」「まことの山の主も知らぬ愚かさを。そして何より、卑しい心が」

姉様はべールをかきあげ、監督を見据えた。おそろしく美しい女が目の前に現れたのを見て監督は、たじろいだ。

「わたしは、おまえのような者が、鉾山の髓を持ち去ることを許さぬ。よく覚えておくことだ。細工は全て腐り果てる。おまえは全てを失うだろう」

怒った監督は馬に鞭をくれてけしかけた。馬が棹立ちになり、背の高い姉様へのしかかるとな、姉様はくずおれた。いや、倒れたわけじゃない。着ていた服や、羽織っていた布が、ふわりと支えを失

つたように崩れたのさ。姉様は、溶け去ったように消えてしまっていた。

「悪魔め！」監督は目を怒らせて罵った。なに、監督は悪魔だって怖れちゃいない、何も気になんかしやしなかった。

さてそれから半日かけてな、泥土のひどい道を歩き歩き馬は進み、馬車も進んだ。そして領主の館に着くと、監督は引き出物を、領主の館の中で一番豪華な部屋へ運ばせたのさ。

木箱の中の細工の数々に、よろこんで領主はみとれてな。次から次に細工物を木箱から取り出し、最後に、あの、固くひきしまったつばみを模した細工を取り出した。

領主は眉をひそめた。それだけは、ひどく雰囲気が違ったからだ。ぬめぬめとした艶と、血のような波紋が、つばみの表面を這い回っていたからだ。沈潜した影のような赤黒い模様が、光も通さないガラス質の石の層を蠢いている。おまけに、さわるとな、ぐんぐんとそれは冷たくなっていった。恐ろしく冷たくて、手の皮がひつつきそうだった。

「なんだこれは」

取り上げた領主は驚いた。温かみを吸って、ただの石の細工が、脹れ上がるのを感じたからだ。脹れて、みちみちと、裂け目が生まれた。おまけに裂け目から、どろりとした液体が滴り落ちた。あつと驚き、あまりの禍々しさに領主は石を放り出した。おぞましくも、花が開くとさらに障気が湧き出したのさ。

障気は、引き出物に触れるや、しゅうしゅうと音をたてはじめた。そして次々に、テーブルの上に取り出された引き出物の数々が、川原の石つころだの錆びた缶と針金の寄せ集めみたいな代物に変わっていった。つばみが花開くに連れてどれもこれも腐り果てていく。黒い障気が、恐ろしく緩慢に漏れ出していく。あまりに濃くて深い闇の色だったから、まるで波打つように木箱の中で揺れ返した。噴出す障気はじわじわと、木箱の中を溢れ、やがて床の上まで垂れ落ちて広がっていく。領主も監督も、衛兵もだれひとりとして近づけ

なかった。そうして、ただ、息をつめて、見守っているしかなかった。ひどい障気は吹き上がり、部屋へ満ちていく。豪華な細工も、石も、全て何もかも侵した。監督も領主も、慌てて窓をあけ、扉を開いて風を入れようとしたり。だがそれが却ってまづかったのさ。障気は散り去るところか、新しい風に遇うと風に粘りつくように流れ出した。そして木箱はな、新鮮な空気が蠟燭の炎を盛り上げるように、どうつと障気を吹き上げたのだ。

部屋の中はもう、真っ黒に汚れた煙のような障気に満ちたものだから、領主も衛兵も監督も、そこにいる人間はみんな、慌てて部屋を飛び出した。開け放した扉や窓から、じゅうじゅうと焦げるみたいな音を出して、障気が館の中じゅうに広がり、うずまいた。

やがて死の花は完全に花開いてな。障気を噴き出しつくして、禍々しくねじれた花弁は、乾ききった芥子の花のように薄く脆かった。毒々しい色彩を宿していたつばみと、ちりちりと焦げるようだった、悪意のように踊りくねる波紋も消え失せていた。

孔雀石は黒くくすんでいた。鉛か、焼け出されたぼっくいみたいにくすみつともなくな。玉や石は白くひび割れ、黄色く濁り、塩を吹いて砕け、細工の屑に成り果てていた。銀や、金すら、溶けてぐずぐずの漿になり、卵の腐ったみたいな色になって垂れ落ちていた。しかもな、手につくと焼けるような酸の痛みを与え、床に染み落ちるとじゅうじゅうと煙を立てて燻った。

障気は、豪華な部屋の中はもちろん、部屋という部屋に入り込んで、石でできた細工ならみんな駄目にしてしまった。

ほうほうの態で館から飛び出してきた領主も、衛兵も、衛兵頭も、そしてもちろん監督も、ただ呆然としてな。煙が立ち込め火事みたいになっている館を見ているばかりだった。煙はもうもうと吹き上がり、あたり一帯に灰を降らせてようやっとおさまった。監督や領主達が館にもどるとな、部屋の中はどこもかしこも、まるで全てが焼け出されたあとみたいな有様になっていたのさ。

領主は、細工の全てが無残な土くれや、灰や、毒の塩や、腐った

錆のかたまりになってしまったのを見て、監督をにらみつけ、大声でわめいた。

「よくもわしに、こんな呪われたものをよこしたな。わしの面目は丸潰れだ。さては、悪魔か、魔女のばばあとも手を結んだか。不届き者が！」

監督も驚きのあまり蒼白になっていたが、すぐに口を働かせた。

「ご領主、なぜご領主に長年仕え、工場の監督にもなったわたくしが、こんな物を運び入れて飾りを腐らすことなどたくらみまじょうか。これは、ご領主を陥れようとする者のしわざに間違いありません。今すぐ探し出して捕えてまいります」

領主は腹の煮えくり返る思いをようよう飲み込んで訊ねた。

「わしに背くのは何者か？」

「この忌わしい細工を作った職人はもとより、道すがら、鉾山の主などと申す妖しい女がおりました。老婆のようななりと声でしたが、顔は娘のように若いのです。そやつはわたくしに、細工は全て腐りはてる、おまえは全てを失うだろうと呪いました。こやつらこそ、この有様を引き起こしたのです」

監督がまくしたてる。領主は考え込んだ。

「いいだろう、だが、おまえが一番怪しいと思われることを忘れるなよ、監督。もしも逃げたり、不届き者どもを連れてこなかったときには、どうなるうか、承知しておけ」

領主は衛兵長を呼んでな。どこへ行っても監督から絶対に目を離すな、そして、献上品の細工を作った職人と、仲間の女を捕えてこいと命じたのさ。監督と衛兵たちは、馬に乗ると、今来た泥道を急いで戻っていった。

さてな、ユーリが細工を作り終えてすぐのことさ。ユーリはこれから何が領主の館で起こるかなんてもちろん知っちゃあいないが、姉様が最後に作らせたあの禍々しい細工のことを思い出して、きつと大変なことになると考えていた。それぐらい、あの石は重たく、不吉でいやあな物だった。

ユーリはさつさと工場から出ていきたかったが、召使いが引き止めてユーリを離さなかった。監督はユーリを手放してしまうつもりがない、だから召使いに職人はどこかへやってしまちな、金を払うな、引きとどめておけと命じていたのさ。なにくわぬ顔でユーリは召使いに應對していたが、内心はこれからどうなるか冷や冷やしっぱなしだった。手の込んだ上等な食事に酒なんか出されたって、ちつともうまくなんかありやしない。

このままですむわけがない、そうユーリは信じていたから、なんとか隙を見て抜け出し、坑道へ逃げ込んでしまおうと腹のうちを決めていた。そのうちひよいと話が逸れて気がついた。

鉱山の中を案内してもらえば良い。そうすれば姉様は存分に力を振るうことができる。

そこでユーリは、物腰柔らかかにこの鉱山で採掘されている孔雀石や、玉や、宝石のことを褒め、こんないい石は、長いこと旅をしていてもあまり見たことがない、ぜひ、切端きりばの様子をみせてもらえないだろうか、ひよっとしたら何かいい細工が作れるかもしれないと、そう召使いにきりだした。召使いは喜んでな。さつそく供の者を二、三人選んで、坑道を案内させた。それも都合がいいことに、中の勝手を知っている人間がいいだろうと、ユーリの知っている職人仲間から選んだのさ。

坑道へ入ると、ユーリは、いちばん複雑で、込み入った坑道の方へと案内させていった。もう、随分古く、ユーリたちの数代前に採掘されていたような、そんな坑道でな。案内の職人達はしぶった。なにせ穴を支える岩盤や、木組みや、鉄材なんか、漏ってくる水で傷んでいるからな、腐って落ちるかもしれない。おまけにどこま

で入ったって鉾脈は枯れてしまっていて、銀どころかもう錫だつて出やしない。水はけも悪く、そこかしこに水が膝までたまっていた。だけどユーリは先にたつて、水なんかかまわずどンドン進んで行く。ユーリの背中を追う職人達は、二また、三またに別れる随道に怖じけて、つい離れがちになった。

ユーリは、折れて分岐している坑道の角を曲がった。ちらちら揺れる角灯の中の、炎の明りとユーリの背中が角の向うへ消えたのが職人に見えた。職人も何気なくついていき、角を曲がったんだが、先を見てユーリの姿がないことに気がついた。先頭の一人が呼びかける。

「旦那。旦那！ どこにいるんですか」 小声で呼びかけたのだが、答えがなかった。坑道の中じゃ決して大声で叫んだりしちやいけな。口笛を吹いてもいけない。山で起こる事故や、姉様の不思議なわざを怖れているものならば、絶対にしないことだ。だから、職人達は、ひそひそと囁きかわし、ともかく先へとユーリの姿を探してみた。みんな角灯の明りを掲げて、できるだけ闇を見透かしながらユーリの明りを探し、引きかえして逆にのびる坑道を探してみたり。はては、ひよつとしたら溜り水の中にも沈んでるんじゃないかと足先でさぐってみたりした。しかし、ユーリはふつりと消えてしまっていてな、職人達にはみつからなかったのさ。

もうしようがない、さんざん探したあげくに職人達は、あきらめて出ることにした。外に出てみるとなんと騒がしい。

監督が帰ってきていたのさ。いつもにまして怒り狂った顔で衛兵達に命令し、召使いにアレクセイ・ヴラソフがどこにいるのか問いただしているところだった。召使いは、供に出した職人達が帰ってきたのを見つけて、これまたアレクセイはどうしたと聞いたものさ。坑道の奥で見失ったと聞くと、召使いは青くなつた。だが、監督はその報告を聞くと、青黒い顔に、ひどく残忍な笑みをうかべ、にやりと口もとをひきつらせてみせた。

「それは好都合だ。袋に入つたものをつかみ出すだけだからな」

監督はぬかりがなかった。衛兵たちに、鉾山の出入口を全て固めさせ、誰も出入りができないようにした。そうしてそのうえで、衛兵たちをみんな、坑道の中へと送り込み、最後に自分も、鉾山の中へと入りこんだのさ。

角灯の明りの列が、坑道の中をざくざくと足早に進んでいく。

監督は坑道の中を足音も荒く歩いた。衛兵たちは坑道の分岐にさしかかると、二手に分かれた。何度も何度も分かれてな、何十人もいた衛兵が、先に進むにつれて減っていった。もつと奥へ進むと、一番後ろにいた監督に付き従う衛兵は、数人になった。それでもユーリ一人を捕まえるのなら充分だ。衛兵達は剣を腰に吊って、皮と鉄でよろつていたから、彼らに素手でかかってもかかないっこない。坑道はまがりくねり、荒々しく削られた地肌が補強されずにむきだしになっていてな、そこは足音がよく響いた。監督と衛兵達の、ざく、ざくという音が、ごつ、ごつ、という重い響きになって、坑道を伝わっていった。

ふと、坑道の中で、誰かが、低く、重々しく呼ぶ声があった。遠いつばやきのような押し殺した声だ。自分のことを呼ばれたように思つて監督は立ち止まった。

「監督」

たしかに聞こえた。だが衛兵達は気がつかないようで先に進んでいく。監督は、頭をあげると耳をそばだて、鋭く腕をふって衛兵達に止められと合図した。衛兵達も角灯を掲げ、前を透かし見たり、後ろをふりかえつて確かめたりした。そろそろと、慎重に、音がしないように監督は歩いて、光が届かない角を曲がったときだ。

誰かが走り去る音がした。ユーリのひるがえした影が見えたように思つて、監督は走り出した。

「待て！」

ユーリは先へ先へとどんどん逃げていく。不思議なことに、背の高く大股な監督が、どんなにいきまいて懸命に走ろうと、ユーリの見え隠れする背中に追いつけなかった。だが、ユーリにはぐれてし

まっ、ということもなかった。監督は齒噛みしながら、溜まり水を蹴立てて走っていく。武装した衛兵たちはとてついでいけなかった。腰の物がじゃまになるし、足元はおぼつかないから、すっころんで岩にかぶとをぶつけるものもいた。

闇の奥深くまで走ってな、監督はじりじりとユリーの背中に追いつきそうになった。息をあえがせて、監督は腕をのばして捕まえようとしたときだ。ユリーはぱっと、壁にあいた穴倉に飛び込んだ。監督はのめって、滑りそうになったのを無理矢理入口に手をかけて体を引き戻し、穴倉の前で熊みたいに突っ立った。ぐいっとな角灯を掲げ、眉をしかめて中をのぞく。

そこは、よく、監督が、自分に逆らうものを閉じ込めた穴倉だったのさ。穴倉の鉄格子は、開かれていた。中は背中がつかえるような狭苦しい、水のしたたりおちる天井に、ひびのいつた岩壁、そして乾いたところのないむきだしの床だ。壁に錆びた燭台と、火の消えて溶け潰れた蠟燭が刺してある。すえたような異臭が漂っているな、監督は顔をしかめた。

用心深く、右手に持った角灯をぐつと突っこみ、中をじっくり見回す。だけれども不思議なことにユリーの姿は影も形もなかった。床の上には古びて黒ずんだ錫の食器と腐った木箱、それに鉄の鎖がぐるぐるとぐるを巻いているのが見えただけだ。目を疑ったが、たしかにここにユリーが飛びこんだのも監督はしっかり見ている。監督は鉄格子と石床のあいだに適当な石を蹴り込み、動かないようにした。そして膝を折り、できるだけ用心しながら穴へ入った。後ろがひどく気になった。いまにも、がしゃんと誰かの手で、入口が閉められるのじゃないか、そんな不安に駆られたが、しかし衛兵が来ればすぐに助け出されるのだ、と思つて監督はもつと中へ入った。とはいえ、何もない。鎖を調べたり、何か隠し蓋でもあるんじゃないかと床をじろじろ見てみたが、怪しいところなどなかった。

「変だな。やつが逃げだせるわけがない」
そういつて顔を上げると、ちよろちよると、トカゲが一匹、ぼう

つと光りながら、床の隅から這い出してきた。陰になっていてわかりにくかったところだ。トカゲはひょいと石の上に乗る、まばたきするとまた岩の隙間へ逃げていった。

それを見て監督はひらめいた、岩と岩の間に手を差し込んで揺り動かすと、岩がぐらぐら動いてな、掻き出すところりと転がった。あとには、人が通れるぐらいの穴がぱっくりと開いている。

「ここから逃げたか。こんなものまで用意するとは職人どもめ、一人残らず農奴にして死ぬまで働かせてやるぞ」

監督は忌々しげに独り言をつぶやいて穴へもぐりこんだ。角灯をしつかりつかんで、トカゲがちよろちよると逃げていった空洞へ入り込む。そうするとな、そこは古びた坑道だった。以前に、ユーリが、半死半生でようよう這いずっていったあの道だ。かまわず監督は大腿でどしどし走っていった。坑道はやがて、水の削りだした、うるこのような模様の続く不思議な一本道へ変わり、水晶の鉱脈の走るトンネルになった。何匹も、青白く光るトカゲがちよろちよると逃げていく。

あたりはしいんと、耳が痛くなるほど静まり帰っていた。水の溜まっていた大鉱洞は、枯れ果てていた。赤鉄鉱の赤錆が、壁面に弱々しくともる結晶の光に照らされ、映し出されて、死にかけた動物の内臓のような地肌を見せていた。

あまりの静けさと岩根にかかる重みから、自分が今どんなに山の奥深くにいるか気づいた監督は、はじめて心細さを覚えて立ち止まった。

そこへ、な、ふらりと、人影が見えた。闇から抜け出したようなな。ユーリだった。足どりには、何かで運ばれているような不思議な感じはなくて、自分の足で立って、歩いていた。

最初、気のぬけたようにぼかんとして監督はそれを見ていた。いぶかしくて顔をゆがめ、ユーリを見てみると、ユーリが語りかけた。別に気負ったような口調じゃない。友だちが話しかけるような普通の声だった。

「おれを、覚えているか？ 監督。あんたに、岩穴にぶちこまれた
ユーリさ」

「ユーリ？」

ああ、と監督は口をゆがめた。記憶の底から、石榴のような石の
細工を作った職人のことを思いだした。そして同時に、こいつがお
れの細工を全部台無しにしゃがったのだな、と勘付いてせせら笑っ
た。

「お前は、死にぞこないの職人の一人だな？ ふん。いちいちおれ
が憶えてなどいるものか、死んだやつも多いかも知れんがそれがど
うした。おまえはさぞ憎いだろうが」

ユーリは言った。何か、憐れむような声だった。

「いいや。憎んでいない。ここへくるまで、憎むよりいいものをた
くさん見つけたからだ。どこまでも強欲なおまえに、わかるだろう
か？ 監督」

監督の口から言葉が唾でも吐くように吐き出された。憎しみだけ
でつくられたおぞましい言葉の響きだった。

「おれはいつでも欲してきた。どこまでも世界は理不尽で強欲だ、
だから俺もそうするだけだ。何が悪い！」

ユーリと、監督は、そうしてにらみ合っていた。ふと、闇から静
かな声が響いてな。

「それがおまえの生きるすべてか？」

監督はたじろいだ。闇の中から、あの、山の主といった、背の高
い女があらわれたからだ。すらりとした体に、黒く丈の長いドレス
を重ね、なめらかな黒い大理石の結晶がおぼろな明りをともし床の
上を、音もなく静かに進んできた。静かな表情で、そして、強く、
人の持たない深い時間と意思に満ちた、不思議な光を沈ませた緑の
瞳が監督を見据えた。

「そうだ。おれはすべて手に入れる。人間も、工場も、この山の富
も、支配して俺のものにする。おまえもだ、美しい鉾山の精め！」

監督は笑った。狂気染みて口の端を吊り上げてな。

姉様は厳かに告げた。

「ならぬ。おまえはこれから知るのだ、悪が何であるか。

古き言葉の指し示す掟により、おまえの人たる体を奪い、よりふさわしい体を与える。“果てしなく竜を追い求める者は、自らもまた竜となるだろう。” 求める姿になるがいい」

そうして、姉様はすらりと手を伸ばし、監督を指し示すとな。次に手のひらで強く圧するように突き飛ばした。

監督の体は何か見えない風に押し流されでもするように吹き飛ばされた。激しい光があたりの岩という岩から発し、貫き徹すように監督の体へ射し入った。そして光はますます強くなつてな、やがて人の形がぼやけて流れ去り、剥がれたそのあとからは赤銅色のうるここと、みるみる脹れあがり大きくなっていくトカゲじみた形が生まれた。仔牛ほどもある、腕と肢の細長くて頭を抱えた、丸まったトカゲだ、だがそれもますます大きくなつてな。やがて牛から象ほども膨れあがり、風車の羽根ぐらいに大きく醜く変わった。鉦道いっぱいに広がったものだから、監督だったものは悲鳴をあげて暴れる、それでも体は膨れ上がった。頑丈な岩の道すらひびが入って大きく揺れ動く。そしてがらがらと崩れ去った。竜は叫び続けていたが、ひとときわ長く尾を引く悲しげな叫びをあげて、虚空へと身を投げだされ闇へ消えていった。

ユーリは呆然と見ていた、尾を引く叫びは、しかしどこか、見えない水流に飲まれていった。

姉様は静かに告げた。

「あの者は、竜の姿で、山の根を長いあいださまよわねばならない。いつか変わるまで」

ユーリはうなずいた。すべてわかっているしに微笑んでな。「姉様はおれを助けたから、悪も救わなければならぬ。ただそれには、長い時間がかかる」

それから二人は、鉦洞のほの明るい闇の中を、手をとって、静々と山の奥深くへ歩いて行った。

さて、それですべてに片がついて幸せになるほど世の中はできちゃいない。鉾山の監督が消えても、ツアーリが領主達の上において、領主が監督達の上において、監督達が人々をこき使うのも、何も変らなかつたさ。しかしユーリはひよっこりと工場へ戻つた、監督が鉾山の奥へ消え失せてから数年たつてからだ。

そのあいだにも領主は新しい監督を送つてよこしていたが今度の監督はまだまともな人間でな、細工物をちよるまかしたり、少しは威張り散らしたりもしたが、それ以上はできない小心な男だつた。前任の監督の顛末を知っているのか鉾山の中には決して入らなかつたし、職人達に手を出すこともしなかつた。

ユーリはもとのとおりの黒い縮れ髪に、黒目の冴えない男にもどつた。声もぼそぼそとした朴訥なもり声にもどつた。もどらなかつたのはあばたぐらいなものだつた。だが以前よりも、もつと巧みに、思うままに石からいくつも細工を作りだすことができてな。中には皇帝に献上されたものもある。名のある教会に捧げられたものもある。遠い異国の王の冠を飾つた細工もあつた。

だがユーリは、それ以上に、親しい人へ惜しげもなく作り出した細工を譲つてやつた。石の花も手放した。それが今スレドニクの教会にあるというわけだ。なんでも、緑の瞳を持った娘の生まれた日に、教会にそれを譲つたそうだ。

だが石の花を手放したのは、それよりさらに優れたものを作り出したからだと噂されている。それは姉様が持つているとも語られるが、本当のところはユーリだけが知っていて、あとはだれも知らない。

終

あとがきの

この作品は、パーヴェル・ペトローウィチ・バジョーフというロシアの作家が書いた『石の花』という短編連作作品に触発されてつくったものです。バジョーフはロシア地方に伝わる民話を収集し、自らの手で再話しました。いろいろな方が訳して、いろいろな出版社から出ているようですが、自分が読んだのは、岩波書店から出ている佐野朝子さん訳のもののようにです。(うるおぼえ) 原作の雰囲気や文体からあんまりはみださずに作るようにしたのですがなぶんうる覚えなのでどうなっていることやら(笑)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2039b/>

石の花

2010年10月8日15時05分発行